

# 佑 啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## そうだ、島へ行こう

松田 源次

今年の夏は記録的な猛暑と豪雨に見舞われるなど気候変動の影響が日本各地で見られた。その影響は私の郷里もしかり。本州とは真腹に全くといっていいほど雨が降ってないという。水不足は深刻で主要産業であるサトウキビや特産品のフルーツ栽培に影響が出始めている。収穫の激減は免れない。

台風銀座と呼ばれて久しい南西諸島。だが、数々発生した今年の台風はこれまでの進路をたどらない傾向にあるようだ。雨台風は被害をもたらすだけではなく、時として大地の恵みとなり人々の暮らしや農作物の生育を助けるなど、自然との絶妙なバランスを保っていた。

長らく生活している千葉の地から郷里の状況を案じずにはいられない。

例えば、小さな亜熱帯の島を離れてかれこれ三十七年余り。

地元の高校を卒業し大学に進学するために期待と不安を抱きながら郷里を後にした。

大型客船に揺られること四十時間。やっとこさ東京湾晴海埠頭に接岸し、船酔いのまま内地へと降り立った。

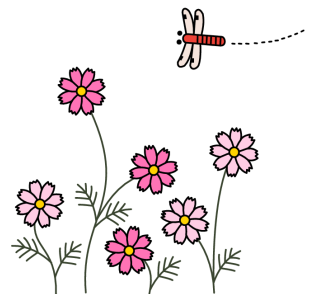
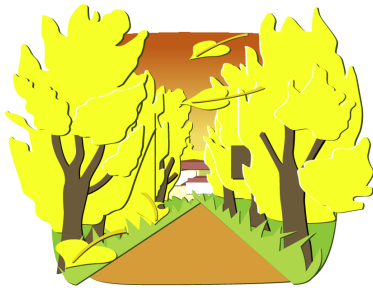
当日は、関西に住む兄貴と東京駅の八重洲口、総武線乗り場で待ち合わせをして千葉に向かうことになった。しばらく時間があつたので駅構内の壁一面に貼られている千葉県全図を見ていたところ、見知らぬ男性二名から「何をしているのですか」と突然声をかけられた。驚いた顔をしていると、相手の第二声は「警察の者です」と名乗った。いわば職務質問である。島にいた時も経験していたが、何とも悪いことをしている訳ではないので堂々と四月から千葉の大学に入学する為、離島から上京したということを説明した。それ以上の問いかけは無かったものの、不満気な顔をして立ち去った。なにせ十八年間の日常会話といえば学校の教師と話す以外は方言が全てであつた。なまりのある共通語と真つ黒に日焼けした顔からして家出人や不審者に間違われたとしても不思議ではなかったのだらう。

教師で思いつくが、そういえば中学時代は担任や部活の監督にはよく殴られたものである。頭から血が出たときは下校後に絆創膏を剥がして帰宅した。分かれば親に余計怒られるに決まっているからバレないようにした。絶対的信頼

の基、教育現場に口出ししない不文律が当時はあつたからだ。

昨今の学校教育を否定するわけではないが、感情あふれんばかりの熱血教師は少なくなつたような気がする。今となつては忘れることのできない懐かしう良き思い出となつていく。

そして高校時代。友人の家を訪ねたときである。玄関からダウン症の女の子が出てきて挨拶してくれた。存在さえ知らなかったのでもう少々戸惑つたが、私もオウム返し挨拶をしていった。学校や地域で見かけたこともなく、未就学は明らかであつたが、友人には彼女の存在さえ知らされてなかった重症心身障害児の児童が近所に居たことも驚いた。一方、警察に保護され児童相談所に送致された小学生の姉弟は、近所で雑貨店を営む家の床下で三ヶ月程生活していたという。下校後は時間をつぶし、夜中になると床下に入り込んで寝ていたようである。猛毒のハブに出くわす危険もあつたろうに。それより帰る家もあつただろうが探そうとしない家族に怒りと疑問を抱いたのは言うまでもない。後に養護施設で生活しているということ聞いた。



昔から福祉の対象でありながら恩恵を受けられない、いわば社会的弱者といわれる人たちは少なくなかった。法律や制度に繋がる相談や申請をしなければ先に進めない。それゆえ地域社会で支える仕組みが必要であり、それが障害者総合支援法にみる共生社会の実現を目指すひとつとなる。また、法律は一般就労を積極的に促進している。当法人においても毎年十数名が一般企業や特例子会社へと就職している。職場見学や職場実習を通して適性を探りつつ本人のやる気を見いだして就職へと導く。就業・生活支援センターの活動成果もあり定着率は年々上がっている。しかし、全てがうまくいっている訳では無く、離職が大きなダメージとなる例もある。その時こそ福祉サービスを利用し、焦らず力を蓄え次の機会に挑戦すればいいだけのことである。

一方、これから就職を目指す人たちにについては、施設外就労を積極的に促進してきた。本年も十月下旬から来年の六月に至る期間で週六日実施することが決まっている。三年目ともなると利用者も心得たもので賃金など条件の良い環境に働く意欲や持続性はかなり高い。「いつからやるのか」「毎日でもできるから入れてほしい」とタバコを吸いながら表情よく聞いている。

内容は、大根の洗浄から箱詰め、運搬作業にいたるが、思ったより重労働である。付き添いの職員は毎日変わるが利用者は週二日程度の休みだけ。私も付き添いで実際にその仕事に従事したことがあるが、午前八時から午後五時まできっちりやつたせいか一日でもきつーと感じた。それでも利用者は元気にそして意欲的だ。ここでは外国人やパートの方が大勢働いている。担当者からも任されているラインを止めることもないので、大変助かっているとの評価も頂いている。認められることがやりがいにつながることは確かだ。

仕事帰りに一杯というわけにはいかないが、定期的な慰労会には欠かせない。焼肉を囲みビール・ワイン・ジュースで乾杯し鋭気を養う。そして仕事を頑張る。得た工賃は旅行・ゲーム機など、自由にそして計画的に使っている。このサイクルを繰り返すうち、ここから何人もの利用者が一般企業に就職した。勿論、離職した者はいない。今年も大根を詰めた段ボール箱を十一段重ねに一億個、パレットに積む仕事が続いている。

「がんばれ諸君、一生懸命働いて国民の義務を果たそうではないか」とエールを送りたい。



さて、島を離れての学生生活。五月病であるホームシックには縁がなかった。これで土日の度に農作業をやらされることはもうないと独り身の自由を喜んできた。一方で困ったことも出てきた。炊事や洗濯は自分でやらなければならぬからだ。男がやるべきことではないと思つていたが間違ひだったとようやく気づいた。また、初めて雪というものを目の当たりにした。沖縄から上京した友人は真っ白な世界に感動したと言つていたが、感動どころか経験したことのない寒さで震え、布団から出られない始末であつた。やはり南国育ちには本土の寒さはこの上もなく身にこたえる。

五年後、就職浪人を経てどうにか就職することができた。人生のよき伴侶を得て子供にも恵まれた。順風満帆と思いきや、突然に次男が大病を患つた。大手術を経てようやく一命を取り留めたが、まだ予断は許さない。これ以来、努めて明るく振舞うことはあるが、安堵という言葉は無縁になった。しかし、多くの人に支えられてここまで来られたことだけは確かである。

人は誰でも原点がある。人生半ばを過ぎて、物心がつき、多感な時期を過ごした地は忘れない。そこがふる里。小さな背中になつても何かと氣にかけてくれるトウとカアがそこにいる。

「そうだ、島へ行こう」元氣なうちに、そして親孝行をするために。徳之島へ。

(ふる里学舎きせつ館施設長)

## 笑顔と元気を

## ももっています

橋本 清蔵

私は五年前に脳出血で倒れ、救急車で運ばれて三ヶ月入院した後、ある介護施設に入所しました。

そして二ヶ月が過ぎた頃、市の地域包括支援の人が来て、これからの事を色々相談しているうちに、市原市福祉会館の中に『ふれあいリハ』という市原市で活動しているところがあると聞かされました。「一度見学に行ったらどうですか？」とのアドバイスを受け、見学に行きました。そしてすぐ自分に合うメニューがあるか、一日体験入所してみました。

体験入所してみた結果、少人数で、メニューも自分に合っていると思いつく所を決めました。「自宅までバスが来られない。」と言われ、大通りのバス停まで出ないといけないので、雨の日や風の日にバス停まで歩くのが大変でした。



その後、『ふる里学舎』に変わリ、今は自宅の前までバスが来てくれて大変嬉しいです。笑顔で「おはようございます！」と声をかけられ、気持ちよくバスに乗り、会館へ向かいます。会館に着くと、請井館長をはじめ、スタッフの皆さんからの「おはようございます！」の挨拶と笑

顔で、朝から元気をもらい一日が始まり、今日はどんなメニューなのか？とボードを見るのが楽しみです。

屋はスタッフや通所の人と一緒に食事をして、昼休みにはジエングをします。最初は二人、三人で始めても、段々と仲間が増え、最後にはスタッフまでもが仲間に入っていました。その後、体操や自律訓練、レクをみんなでエキサイトして盛り上がり、汗もかき、ストレス発散をしています。少し休憩した後、請井館長やスタッフのみなさんから「今日はご苦労様でした。」と元気な笑顔で見送られ、自宅まで安全運転で送り届けてもらい、楽しいふれあいリハの終了です。



アネッサにも一年半通所して

いますが、アネッサのスタッフからも市原市福祉会館と同様に、笑顔と元気をもらっています。

今年市制五十周年ということで、七月にアネッサ体育館で市原市障害者スポーツボッチャ大会にアネッサから尾張さんと藤さんとチームを組み、参加しました。三人チーム五十八組のトーナメントで運よく優勝できました。市原市障がい者支援課長、里見大会委員長、佐藤福祉会会長はじめ、ボランティア、NPO、大会関係者、ご協力下さりありがとうございました。

そして今私は、千葉県身体障害者作品展に向けて出品する作品を、アネッサで楽しく制作しています。(地域活動支援センター利用者)

橋本さんは普段、市原市福祉会館とアネッサを利用して

いる方です。どちらにおいてもムードメーカー的な存在で、冗談を交えたお話が上手なので、橋本さんの周りにはいつも笑顔で溢れています。

芸術的なセンスにも長けており、昨年は千葉県障害者作品展に竹細工を出展し、千葉日報賞を受賞しました。また、同じ曜日のメンバーや、スタッフの似顔絵を色紙に書いて下さることもあり、多方面において皆を楽しませてくださっています。

市原市福祉会館

支援員 三浦

歩美

## 節目

宮崎 理

そうでない方も、子どもから大人まで大会に参加し、地域に障がい者スポーツの輪を広げる」という大会の趣旨に多くの方々からご賛同頂き、スタッフ含め四百三十名が集まり大盛況であった。

アネッサデイセンターからも二組六名の利用者がエントリー。普段使い慣れているホームグラウンドの体育室で、普段通りの力を発揮し、なんと優勝!! もう一組も第四位。二〇二〇年にJAPANのユニフォームを着てパラリンピックに参加・・・勝手に夢は膨らみ、妄想に浸る。実行委員の立場を忘れしばし歓喜に浸らせて頂いた。



ふる里学舎はというと、開所して丸二十年が経過し、秋には二十周年記念イベントが行われる。こちらにおいても実行委員として関わることとなり、イベントに合わせて法人のロゴマークと施設紹介のDVDを作成する」という大役を仰せつかった。

「なんでも鑑定団」市原の収録や原付自動車に限りご当地ナンバープレートの交付等、五十年を祝う内容も様々である。その一環として当事者団体の代表者、市内施設職員、特別支援学校の先生、障害者スポーツ関係者等が集まり、「市原市障害者スポーツボッチャ大会」を行う事となり、私はその一員として実行委員に携わることとなった。

大会当日は、猛暑日が続く中で、比較的過ごしやすいスポーツ日和であった。会場はアネッサの体育室。「障害のある人も、

成においては、プロの制作会社に依頼しふる里学舎の居室や作業・静風荘での生活の様子等を撮影した。中でもパン製造科を紹介した松尾支援員は十回も取り直し・・・十五秒ほどの映像枠なのに、二十分以上の撮影時間を費やした。カメラの前で緊張している職員に対し、笑顔を要求する嫌味な先輩職員が自分。この相反する空気感はずいぶん面白い。日常の断面を切り取り十五分に凝縮する作業を繰り返し、間もなく完成する。

当日の流れもほぼ確定した。「ふる里学舎の過去・現在・未来」と題した里見理事長の講演。その後、家族会等も交え懇親会が行われる。懇親会のテーマは「余興で振り返る二十年」。何ともふる里学舎らしいテーマで当日がとても楽しみである。



ふと、自分を振り返ると、学生時代はアルバイトをしても一年間続くことのない飽きっぽさを持つ人間だった。しかし、ふる里学舎では違った。法人より十五年の永年勤続を賞されエジプトに行かせて頂いた嬉しい思い出もあり、来年で二十年目を迎えることとなる。

就職した頃は通所部を担当。当時の通所利用者は十二名で、木工作業を行っていた時がとても懐かしい。その後も椎茸やミカン栽培等の作業に勤しみ、寮業務を担当する生活係も経験した。そして、十年前にアネッサデイセンターの開所に伴い異動勤務年数の半分以上をアネッサで過ごすことになった。その頃

は、子どもや身体障害の方々に対する支援に困惑し、地に足が付いていないと叱咤された時期もあったが、利用者、その家族や周囲の支えもあり、現在もやり甲斐のある仕事を継続させて頂いている。そして今、様々な経験を得て、その時々のお会いと感謝の気持ちには大きな財産である。節目として自分を振り返るにあたっては、初心に帰り「誰かのため」という出発点から考えたい。そして、自分が誰かに活かされているという実感の中で、新しく見ることも多くあるように感じる。このスタイルは今後も継続していきたい。

(アネッサデイセンター

支援主任)

ボッチャってなに・・・?

最初に目標となる白いジャックボールをコートに投げ入れます。そのジャックボールに、赤と青が六個ずつあるカラーボールを対戦チームよりも近づけた方が勝ちというゲームで、カールングにルールは似ています。一九九二年バルセロナパラリンピック大会から正式種目になりました。競技スポーツとしてだけではなく、子供からお年寄りまで、障害者と健常者の区別無く楽しめる、レクリエーションスポーツとしても参加できる競技です。

編集後記

東京オリンピック・パラリンピック開催決定に続き、東北楽天の初優勝!! スポーツ界の元気な話題が続きました。ふと気付けば金木犀が香る季節に。秋の訪れと共に佐啓八十六号をお届けします。長澤 里佳